

## 初期の詩集に見るブロンテ姉妹の詩

宮川下枝

ブロンテ姉妹は *Currer, Ellis, Acton Bell* の男名をもって、*Brontë Poems* なる詩集を世に出したのであるが、この三人の詩集を読んでその特長を考えてみるのも、誠に興味深い。

既に熟知された事実であるが、この彼等の最初の出版物が世に出る迄の経過を簡単に述べておきたい。エミリー・ブロンテが秘かに書きためていた一冊の詩集を姉シャーロットが偶然にも見付け、その素晴らしさに打たれた事から始る。控え目なエミリーは非常に憤慨したのであるが、姉の熱心なすすめにより、遂にこれを世に出すに至ったことは有名である。妹アンも自分の書いていた詩を姉に見せ、シャーロット自身も自分の詩を纏めてここに三人の詩集を出版することに至ったのであるから、実に才能に溢れた姉妹たちであったわけである。この (169mm×105mm) なる小さい本を出版するに当たっての出版社探しの苦勞もこれ又よく知られた事実であるが、シャーロットは云い出した責任者として挫けることなく交渉を続け、叔母エリザベス・ブランウエルの遺産の中から自費出版することが出来たのである。1846年5月、John, Hasler of Fleet Street により、165頁の小冊子 (シャーロットの詩19篇、エミリー、アンのものそれぞれ21篇) のものが世に出たわけである。<sup>(1)</sup>

これは最初2冊しか売れなかったと云われているが、挫折するような姉妹ではなかった。出版社のすすめにより、各々 *Wuthering Heights*, *Jane Eyre*, *Agnes Grey* なる小説を世に出し名声が上って来た時、Smith Elders 出版社が1848 *Poems by Currer, Ellis and Acton Bell* として表装も新たに出版してくれたものである。この三姉妹の勇氣、挫けぬ魂は驚嘆に値するも

のである。

さて、三人の特長をそれぞれに考えてみるならば、姉シャーロットの詩は想像力に溢れ、その想像力も劇的な力に溢れている。只一言によって大きな事実を暗示したブラウニングの詩を連想する。それに加えて、彼女の熱烈な情熱が加っているのであるから、誠に印象的である。

エミリーは、自分以外に存するものに向って、常に話しかけ、彼女の心情を吐露しているのであるが、彼女のうちなるものは、理解し難く、又神秘的であるが故に、それだけ魅力的である。

アンは純粹な信仰に溢れ、神に対する敬虔な念に満ちた詩をかいている。

だがこの三人の詩の中で共通して読みとることの出来るものは、不屈の魂、そして死後の世界に対する信念であろう、三人の詩の二、三を取りあげつつその特長を考えてみたい。なお、それぞれの詩形については、後程述べることにしたい。

### Ellis Bell (Emily Brontë)

野性的でメランコリックで心を高めるような詩 (wild, melancholy and elevating)<sup>(2)</sup> と姉シャーロットが絶讃したエミリーの詩から考えてみたい。

It has been the fashion to speak of her as a metaphysical poet, but I prefer to call her a pantheist ; she saw the universe as a whole, and her vision comprehended the lark, the wooly sheep, the snowy glen, the nature of being and God himself as all part of one great harmony. Nor can her thought be called speculative; she writes with a majestic, almost casual, certainty.<sup>(3)</sup>

(エミリーを形而上詩人と呼ぶのはこれ迄の流行であるが、私は彼女を汎神論者と呼びたい。彼女は宇宙を全体として見た。そのビジョンには、ひばり、ふさふさした羊、雪の谷間、人間存在、神御自身を一つの大きな

---

調和の一部として含んでいる。彼女の考えは思索的とも云へぬ、堂々と何気なく確実に書いている。)と Phyllis Bentley は彼女を評している。

1826年6月5日父パトリック・ブロンテが、リーズ市より木製の人形を求めて来て以来、ブロンテ兄弟の歴史物語が始まり、やがて想像の国アングリヤ、ゴンタル王国が生まれ、エミリーの詩にはその王国の女王オーガスタスの情熱的なうたが多いのであるが、こうした物語とは別に単純に自然をうたう詩もある。だがそうした自然に対する火のような情熱は矢張り表われている。

Stars (星)

Ah! why, because the dazzling sun  
Restored our Earth to joy,  
Have you departed, every one,  
And left a desert sky?

All through the night, your glorious eyes  
Were gazing down in mine,  
And, with a full heart's thankful sighs,  
I blessed that watch divine.

(目もくらむ太陽がこの大地に  
歓びを回復したからとて、  
ああお前達は、何故悉く消え  
佻しい大地を残して行ったのか。

夜じゅうお前達の輝やく眼が  
私の眼をのぞきこんでいた。  
そして私は心からの感謝のため息で  
その清らかな見張りを感謝した。)

詩は更に続くのであるが、清らかで静かな星が夜空で寝ている自分を見守ってくれていることに感謝し乍らも、朝が来てキラキラ光る太陽が現れて、その小さい光を悉く消してしまう時にエミリーの太陽に対する激しい憎しみはすざまじいものがある、

“My heart is but of fire and ice.”

(私の心は火と氷である。) の言葉通りである。ブロンテ姉妹は父の厳命によりカーテンをかけることを許されなかったと云う。窓辺にベッドを寄せてねるエミリーにとって瞬く星の光は大いなる慰さめであったのであろう。

小説に於いて多くの人物の死の場面を描いたエミリーであるが、その詩に於いても実に real に死の瞬間を描いている。

A Death-Scene (死の場面)

“O Day! he cannot die  
When thou so fair art shining!  
O Sun, in such a glorious sky,  
So tranquilly declining!

(おお日よ。お前がそのように美しく輝いている間は彼は死ぬ筈はないわ。おお太陽よ、このような輝かしい空でこんなにも静かに沈んでいる時に。)

.....

One long look, that sore reproved me  
For the woe I could not bear  
One mute look of suffering moved me  
To repent my useless prayer

(じっと長くみつめられ、その痛みは

---

私の堪えることの出来なかった  
悲嘆に対し私の心を責めた。  
黙って苦悩のまなざしで見つめられると  
私の役にも立たぬ祈りを後悔した。)

高く波打つ胸の鼓動も止み、  
それ以上の歎きのしるしも見られない。

Paled, at length, the sweet sun setting  
Sunk to peace the twilight breeze,  
Summer dew fell softly, wetting  
Glen, and glade, and silent trees.

(色あをざめて遂に美しい夕陽は  
平和に沈み夕暮のそよ風が吹く  
夏の露は静かに降り  
谷間も林間も無言の木々をも濡らしている。)

Then his eyes began to weary,  
Weighed beneath a mortal sleep,  
And their orbs grew strangely dreary,  
Clouded, even as they would weep.

(彼の眼は死の眠りの重みのもと、  
疲れ果て始め  
眼球は不思議ともものうくなり  
泣いているかのように曇ってくる。)

But they wept not, but they changed not,  
Never moved, and never closed  
Troubled still, and still they ranged not—  
Wandered not, nor yet reposed!

(でもその眼は泣きもしないし、変りもしない、  
動かすこともなく、閉じることもない、  
だがなほ悩み動かしもしない。  
キョロキョロと見廻しもせず、休みもしない。)

So I knew that he was dying—  
Stooped, and raised his languid head  
Felt no breath, and heard no sighing,  
So I knew that he was dead.<sup>(5)</sup>

(それで彼は死にかかっている事が分かった。  
かがみこみ そのけだるそうな頭を  
もたげてみた。  
もう息もせず嘆息もきかれず  
死んだのだという事が分かった。)

死んだのだろうかと胸に手をあててみてその心臓の鼓動に触れようとしても何も感じる事の出来ぬ瞬時の思いは、死者を経験した人でなければ分からぬものである。ヒースクリフの死を想い起させる場面である。

The Methodist upbringing she received from her aunt, her own reading of Cowper's poetry—both of these perhaps, helped to persuade her into the conviction that she was a destined wretch,"<sup>(6)</sup>

(おばから受けたメソヂストの宗教教育により、又クーパーの詩を読んだ事により自分は生れ乍らの卑劣漢と信じこむに至った。) と C. Day Lewis は説くのであるが、エミリーの詩の中で一番生氣溢るるものはこの心の中の格闘を描くものであろう。

The struggle of the soul against a predestined doom is one from<sup>(7)</sup> which the freedom motif takes in Emily Brontë's work.

---

(宿命づけられた運命に対する魂の苦闘はやがてエミリー・ブロンテの作品の中では自由に対するあこがれの題材にもなるのである。) と C. Day Lewis は述べているのであるが、この心の中での赤裸々な苦闘は彼女が長く秘かに書き続けていたものである。人に読ませる為に書いた詩ではない為一行一行には一言の虚飾もなく書かれている為に、それだけに力強いものなのである。

この心の戦いを“The Philosopher”(哲学者)なる詩の中に見てみよう。  
書き出しの一節には、

“Enough of thought, philosopher !  
Too long hast thou been dreaming  
Unlighted, in this chamber drear,  
While summer’s sun is beaming !<sup>(8)</sup>

(思索はもう沢山だよ。哲学者よ。  
お前は余りにも長々と夢を続けて来た、  
夏の日には輝いているのに  
日にあたる事もなく、この陰鬱な部屋の中で。)

考えに考え抜いた自分自身を傍観的に眺めるエミリーの姿がうかがえる。長い間の果てしない自分の夢を歎くが、正体もなく眠りこけて、忘れてしまう時が来ればよいと切望する。外界に如何に雪が降ろうと、雨が降ろうと、気附かぬ程ぐっすりと眠りこんで、この苦しい思索から遁れることが出来さえしたらと彼女は切実に願うのである。天国に行こうと、地獄に落ちようと、この戦いは治さまらないだろうと、彼女は云う。

“I saw a spirit, standing, man,  
Where thou dost stand—an hour ago,  
And round his feet three rivers ran,  
Of equal depth, and equal flow—

A golden stream—and one like blood  
And one like sapphire seemed to be  
But, where they joined their triple flood  
It tumbled in an inky sea.

(わたしは一人の精霊が立っているのを見た。  
一時間前に、お前が立っているところに、  
その足もとに、同じ深さで同じ流れで、  
三つの河が流れていた。

金色の流れ、それから一つは血のようで、  
もう一つは、サファイアのようにみえた。  
だが三条の水流が相合するところで、  
それはインクのような海へ突入した。)   
小さな体の中にいる三人の神々、  
金色の流れ  
もう一つは、サファイアのような流れ  
だが一つは血の流れのようなもの。

知的な金色の流れ、  
澄んだ美しい心の流れ、  
毒々しい汚れた心の道、  
そのようなものを自分の中に見つめている彼女にはなかなか平静は与え  
られない。そして自分の求めて来た「彼」精霊を天国に地獄に大空に探し  
求めて来た、終ることのない探求であった。

Had I but seen his glorious eye  
Once light the clouds that wilder me,  
彼の輝く眼が、私を困惑させる雲々を、  
明るく照らすのを、一度でも見さえしたら、  
私はこの自分の思索を止めましょう。



---

Oh, let me die—that power and will  
Their cruel strife may close  
And conquered good, and conquering ill  
Be lost in one repose!

そして最後には、この心の戦いが終る一つの憩いとなる事を求めている。

(おお私を死なせて下さい、

敗北した善も悪を勝利することも一つの憩いに帰するように。)

母はいなかったにしろ、恵まれた家庭生活の中であって、何故に、彼女はかくも魂の格闘を経験しなければならなかったのであろうか。それはブラッセルでのヘガー氏も彼女を評して述べているような

“Emily had a head for logic, and a capability of argument unusual in a man, and rare indeed in a woman according to M. Hegel•••”<sup>(9)</sup>

(論理的な頭脳を持ち、男性にも稀な程の論理の能力を持ち、女性には全く見られないような知性をもつエミリー故なのであろう)と説くのである。そして強いものへの憧れ、勇敢なものへの思慕は

“私の長年探し求めて来た私を見つめてくれるその魂よ”

となるのである。

“And even for spirit, seer,  
I’ve watched and sought my life-time long,

The brooding calm, the submissiveness, the mounting ecstasy, the sense of spiritual union with God,—the Invisible, the Absolute, and then the agony when the trance thins away.”<sup>(10)</sup>

(熟慮する静けさ、従順さ、上昇する恍惚さ、神との——目に見えぬもの——絶体的なる者との精神的一体観、だがこの忘我状態の溶けた時の苦悩)と C. Day Lewis はエミリーの精神状態を説くのである。

最後にエミリーの場合その情熱的な確信を述べておかねばなるまい。

“No coward soul is mine.” (臆病な魂は私のものではない。)の中に於ける

Though earth and moon were gone,  
And suns and universes ceased to be,  
And thou wert left alone,  
Every Existence would exist in thee.<sup>(11)</sup>

(地も月も消え去るとも  
太陽も宇宙もなくなるとも  
汝一人残るならば  
あらゆる存在は汝のうちにあるのである。)

ヒースクリフとキャサリンの愛のうちにうたわれた愛こそ、この詩の中の信念、一つの魂であるとの激しい愛、純粹なる情熱、拔郡の情熱なのである。

但しこの詩はエミリーの死の前に書かれたもので、遂に到達した彼女の信条を謳ったものであるから、この初期の詩集には入っていないものである。

### Acton Bell (Anne Brontë)

アンの詩は姉エミリー達に比べれば単純だがそれでも姉達と同じように、私の魂は飛び立ちたいと云っている。純粹に舞い上ってしまう姉エミリーとは異なり、彼女は、私の心には冬の冷さが忍び寄り現実はこのように束縛されているのに、どうして翔昇出来ようかと嘆く。

#### The Arbour (あずまや)

I'll rest me in this sheltered bower,  
And look upon the clear blue sky,  
That smiles upon me through the trees,  
Which stand so thickly clustering by,

(この木陰のあずまやで休みましょう。  
そして澄んだ碧空を見上げましょう。  
わさわさと繁る木を通して  
私に微笑みかけるこの空を。)

---

And view their green and glossy leaves,  
All glistening in the sunshine fair,  
And list the rustling of their boughs,  
So softly whispering through the air.

(美しい日の光に輝いている  
つやつやした木の葉を眺めましょう。  
そして空高くそっと囁く  
枝のサラサラと鳴る音をききましょう。)

And while my ear drinks in the sound,  
My winged soul shall fly away,  
Reviewing long departed years  
As one mild, beaming, autumn day,

(その音にとっぷり聞き入っている間に、  
羽根のはえた私の魂は翔んでいくでしょう。  
おだやかな光溢れる秋の日のように、  
過ぎにし<sup>としつき</sup>年月を振り返り乍ら。)

And soaring on to future scenes,  
Like hills and woods, and valleys green,  
All basking in the summer's sun,  
But distant still, and dimly seen.

(夏の日を浴びて立つ  
遙か遠くのかすかな丘や  
森や谷間のような  
未来の景色へととんで行きます。)

Oh, list! 'tis summer's very breath  
That gently shakes the rustling trees—  
But look! the snow is on the ground—  
How can I think of scenes like these?

(まあ、きいてごらんなさい。  
サラサラと鳴る木々を静かに動かす  
夏の息吹を、  
でもみてごらんなさい。地上は雪なのよ。  
何んで私はこんな景色のことを思ったのかしら?)

“Tis but the frost clears the air,  
And gives the sky that lovely blue,  
They're smiling in a winter's sun,  
These evergreens of somber hue

(空気を綺麗にし、空をこんなに青くしているのは  
この霜なのよ。  
冬の太陽のもとで微笑み、  
常盤木の落着いた緑を見せてくれる。)

And winter's chill is on my heart  
How can I dream of future bliss?  
How can my spirit soar away,  
Confined by such a chain as this?  
(私の心に冬の冷さがあるのに、  
未来の幸福なんて考えられるかしら?  
このような鎖で繋がれているのだから、  
私の魂は高く舞い上る事も出来ないわ。)

更に真実とやさしさに溢れ、信仰に満ちたアンの詩をみよう。主は罪人の歎きを理解して下さるとの趣旨である。

Evidence that Anne's religion was particularly dear to her is available from a considerable number of her poems. Her search after God began in infancy and became a passionate dedication, the main fruits of which were

---

her courageous death

Anne's mind was logical, analytic, and thoroughgoing. She always followed the rationale of Argument, even to unpalatable conclusions. Her heart, was vivid, eager and sensitive. A good deal of her verse is aimed at reconciling the demands of reason and feeling.<sup>(13)</sup>

(アンの信仰が彼女にとって大事だった事は、相当数の彼女の詩から分かる。神の探求は子供の時から始まり、情熱的な献身となり、その結実が彼女の勇氣あふれる死として現れるのである。アンの知性は論理的であり、分析的であり、且つ徹底したものであった。たとえ、自分には不快な結末となっても、彼女は常に論理の正当化を計った。彼女の心情は明瞭で熱心敏感であった。彼女の詩の多くは理性と感情の調和を目指している。) と Edward Chirham は述べる。

The Penitent (悔悟者)

I mourn with thee, and yet rejoice  
That thou shouldst sorrow so;  
With angel choirs I join my voice  
To bless the sinner's woe.<sup>(14)</sup>

(私はあなたと一緒に悲しむわ。  
でもあなたがそのように悲しんでいるのは嬉しい  
罪人の歎きを慰さめて下さる  
天使の歌声に私も声を合わせます。)

Though friends and kindred turn away,  
And laugh thy grief to scorn,  
I hear the great Redeemer say,  
"Blessed are ye that mourn"

(友達も親戚も顔をそむけ

あなたの歎きをあざ笑っても  
主の御声がきこえます、  
“汝悲しむものは幸なり”

Hold on thy course, nor deem it strange  
That earthly cords are riven,  
Man may lament the wondrous change,  
But “there is joy in heaven!”

(あなたの道を進みなさい。  
地のきずなが裂けようとも、  
それを不思議とっては駄目、  
人はよしやこの変化を歎くとも  
でも「天国には喜びがある」のです。)

序にもう少しアンの純粋な信仰の溢れた詩をあげてみたい。

Music On Christmas Morning. (クリスマスの朝の音楽)

Music I love—but never strain  
Could kindle rapture so divine,  
So grief assuage, so conquer pain,  
And rouse this pensive heart of mine—  
As that we hear on Christmas morn,  
Upon the wintry breezes borne.<sup>(15)</sup>

(私は音楽は大好き。でもクリスマスの朝、  
静かな冬の風に送られて来る  
歌声をきく時ほど  
もの思いに沈む私の心に  
かくも神聖に歓喜をかき立て  
歎きを和らげ、苦痛を征服してくれる  
調べはないわ。)

---

Though Darkness still her empire keep,  
And hours must pass, ere morning break,  
From troubled dreams, or slumbers deep,  
That music kindly bid us wake,  
It calls us, with an angel's voice  
To wake, and worship, and rejoice,

(でもまだ朝が明ける迄には  
悩まされた夢や、深い眠りから覚める迄は、  
まだ暗やみがあたりを占め  
何時間かあるのだけど、  
その音楽は親切に「お起き」と云ってくれる。  
「天使の声で目覚め、神を崇め、喜びなさい」  
と我々に呼びかけてくれる。)

To greet with joy the glorious morn,  
Which angels welcomed long ago,  
When our redeeming Lord was born,  
To bring the light of Heaven below,  
The Powers of Darkness to dispel  
To rescue Earth from Death and Hell.

(輝かしい朝をよろこびをもって迎える為  
それは昔天使達が迎えたもの、  
我が償いの主の生まれ給いし日、  
天の光を地上にもたらし  
闇の力を追い払い  
地上を死と地獄から救う為に。)

While listening to that sacred strain,  
My raptured spirit soars on high,  
I seem to hear those songs again  
Resounding through the open sky,

That kindled such divine delight,  
In those who watched their flocks by night.

(その聖なる調べをきくうちに  
私の歡喜の魂は高く舞い上り  
夜空に響くうた声をもう一度きくようだ。  
夜群を守る羊飼いを聖なる喜びで  
満たしたその歌声を、)

With them, I celebrate His birth—  
Glory to God, in highest Heaven,  
Good-will to men, and peace on Earth,  
To us a Saviour-king is given;  
Our God is come to claim His own,  
And Satan's power is overthrown!

(皆と私も主の御降誕を祝います。  
いと高き処にて神には栄光あれ、  
人にはよるこび、地には平和あれ、  
我々に救い主なる主は与えられ、  
神はその力をあらわし  
サタンの力をくつがえす為に來り給うのだ。)

A sinless God, for sinful men,  
Descends to suffer and to bleed;  
Hell must renounce its empire then,  
The price is paid, the world is freed,  
And Satan's self must now confess,  
That Christ has earned a Right to bless:

(罪なき神、罪多き人間の為  
苦しみ血を流す為に降り給うた。  
地獄はその帝国を否定せねばならぬ。  
代償は払われた、世界は自由になった、



---

悪魔自身今や告白せねばならぬ

「キリストは祝福の権利を得られたのだ」と。

Now holy Peace may smile from heaven,  
And heavenly Truth from earth shall spring.  
The captive's galling bonds are riven,  
For our Redeemer is our king,  
And He that gave his blood for men  
Will lead us home to God again.

(今や聖き平和の神は天より微笑み

天の真実の神は地上より立ち上る、  
捕われ人の辛い束縛はとかれた、  
何故なら救い主<sup>ぬしゆう</sup>は我等の王であり  
その血を人々の為に流し給うた主は  
我々を再び主の家に  
導き給う方であるから。)

As she (Anne) has already said in the poem, her guest was for a Christian God, Emily's was not.<sup>(16)</sup>

(アンの求めているのはキリスト教の神であり、エミリーのはそうではなかった。) と Edward Chitham の述べる如く、神秘的な神を求める姉エミリーとは異り、アンは純粋にキリスト教徒であった。このアンも信仰に懐疑的な時もあったが、ここに引用したものは彼女が純粋に信仰的だった1840～5迄の間の詩である。

### Currer Bell (Charlotte Brontë)

理性的なそして激情迸るエミリーの詩、静かでやさしい信仰溢るアンの詩に比べると姉シャーロットの詩は実に想像力に溢れていて、物語詩を読んでいるような興味に唆られる。どれも長い詩が多いので全部をここに掲げる事は出来ないので概略と一部だけを引用することになる。"her

creative imagination”（彼女の創造的な想像力）<sup>(17)</sup> と Margaret Blom は言う。

Pilate's Wife's Dream（ピラトの妻の夢）

ヨーロッパの人々は群衆の叫びに押されて、イエスを遂に十字架にかけなければならなくなった当時のローマの総督ピラトに対してはその胸中を思い非常に同情的である。現にスイスには、その悩めるピラトの死後の霊を迎えたのであるというピラトス山というの迄ある。

だがシャーロットは聖書の中の只一章

「ピラトは言った。『あの人はどんな悪事をしたのか。』すると彼等は  
いっそう激しく叫んで、『十字架につけよ』と言った。ピラトは手のつけ  
ようがなく、かえって暴動になりそうなを見て……言った。

『この人の血について私には責任がない。』 マタイ伝27章22～24の一部  
の記事から、ピラトの妻の立場となって眠れぬ苦しみ、キリストへの同情、  
罪なくして死にわたされた主の苦悩を思い夫ピラトへの怨みを述べるので  
ある。

I see it all—I knew the dusky sign—  
A cross on Calgary, which Jews uprear  
While Romans watch, and when the dawn shall shine  
Pilate, to judge the victim will appear,  
Pass sentence—yield him up to crucify;  
And on that cross the spotless Christ must die.<sup>(18)</sup>

（私には、みんな見える。あの陰鬱なしるし。  
ローマ兵士の見守る中を、ユダヤ人の建てた  
カルガリーの丘の十字架なのだ  
犠牲者の現れるのを判断して、朝になると、  
ピラトは宣告したのだ。  
彼を十字架につけるように。  
だからあの十字架上に罪なきキリストは  
死ななければならなかったのだ。）

---

I do not weep for Pilate

(私はピラトの為には泣かない。)

と彼女は夫に対しては一片の同情も示さない。

How can I love, or mourn, or pity him?

(彼をどうして愛し、彼の為に歎き悲しむ事が出来よう?)

と夫に対し非常に冷酷で只イエスに対する同情のみに溢れている。

I wait in hope—I wait in solemn fear,

The oracle of God—the sole—true God—to hear.

そして最後には自分には真の神の御告が聞えるとの信念に溢れる行で終っているのであるが、この聖書の只一ヶ所よりこのように劇的な場面の数々を想像出来るシャーロットは、一冊の古本をイタリーの街で見付け出して読む事により *The Ring and the Book* なる詩を書き上げた Browning にも似た想像力あふれる処があるように思われる。又その純粹な信仰は彼女の伝記でよく分る。

Protestant Christianity on her early years. Reared by a clergyman, and by Aunt Branwell, who was a fundamentalist Methodist, Charlotte grew up familiar with basic Christian doctrine.<sup>(19)</sup>

(若い時代の彼女のキリスト教信仰、牧師の父、正統派メソジスト信者のおばブランウエルに育てられ彼女は基礎的なキリスト教の教えに親しんでいた。)と Margaret Blom は述べる。

Charlotte with iron self-control and her fervent desire to live a Christian life<sup>(20)</sup>

(シャーロットの鉄のような自制心とキリスト教徒として生きたいという熱烈な願いと Margaret も述べているように、シャーロットも最初は熱心な信者だったようである。

シャーロットの空想溢れる詩は、

the Angrian fantasies which had long been the channel of her suppressed emotional life<sup>(21)</sup>

(長い間抑えた感情の世界はアングリヤの物語の中での空想となって)

ほとぼしり出て、又こうした空想上の詩ともなったのであろう。

Mementos に於いては、彼女はかたみの宝石箱を開けて、明るい少女時代を過した夫人を思い浮べる。好言にだまされ、結婚し、虐待され死んでゆく。子供が残されるが、その子も父には愛されぬ子供である。これも亦想像力溢れる劇的な詩であるが、この詩には、愛の成就しなかったシャーロットの歎きが切実に表明されている。

Mementos. (かたみの品)

Arranging long-locked drawers and shelves  
Of cabinets, shut up for years,  
What a strange task we've set ourselves!  
How still the lonely room appears!  
How strange this mass of ancient treasure,  
Mementos of past pains and pleasures,<sup>(22)</sup>

(長年の間鍵のかかっていた

キャビネットの引き出しや棚を

整理するなんて、何んて変わった仕事に

打ちこんだことだろう。

この淋しい部屋は何と静かに思われること！

この過去の苦痛と歎びの

一とかたまりの過去の宝石は

何と不思議な事よ！)

ハウースのブロンテ Museum にあった家具の中に扉にキリストの12使徒の絵を描いた立派なキャビネットが置いてあり流石牧師の家なのだと  
思ったものだった。

I scarcely think, for ten long years,  
A hand has touched these relics old,  
And, coating each, slow-formed, appears,  
The growth of green and antique mould

(10年もの前には、これ等の古い遺品に  
手が触れたのだとはとても思えない。

徐々に一つ一つには  
緑の古いかびがはえている。)

Hers was this chamber, in her time  
It seemed to me a pleasant room,  
For then no cloud of grief or crime  
Has cursed it with a settled gloom.

(奥さまの部屋はここだった。  
生きておいでの時は、私には楽しい部屋に思えたけど、  
その頃には歎きのかげも犯罪のかげも  
この部屋を占領してはいなかったし  
呪ってもいなかった。)

このたった一言 crime なる言葉の故に何かがあった事が暗示される。  
これも Browning の詩 My Last Duchess に似ているところであって、正  
面切っては述べてはいないが候爵は夫人を殺したのだと見事に暗示してい  
るのと手法に全く似ている。

Reclined in yonder deep recess,  
Ofttimes she would, at evening, lie  
Wataching the sun, she seemed to bless  
With happy glance the glorious sky.  
She loved such scenes, and as she gazed,  
Her face evinced her spirit's mood,  
Beauty or grandeur raised  
In her, a deep-left gratitude.

(あの向うの深くぼみに凭りかかり、  
度々陽を見つめながら夕方など  
腰を下ろしていたものだった。  
明るい空を楽しそうにみつめつつ  
幸福そうだった。  
彼女はあのような景色が好きだった。  
みつめているその顔には心の色が表れ、

心のその感謝の念が  
美しく華やかに見えるのだった。)

Deceived by false and guileful tongue,  
She gave her hand, then suffered wrong,  
Oppressed, ill-used, she faded young,  
And died of grief by slow decay.

(虚偽で狡猾な言葉にだまされ、  
その申し出を承諾して、いぢめられ、  
抑圧され、虚待され 若くして衰え  
だんだんに弱って悲しみのうちに死んだ。)

And heaven did curse—they found him laid,  
When crime for wrath was rife,  
Cold—with the suicidal blade  
Clutched in his desperate gripe.

(天の呪いが来た。  
絶望的に自殺の刀を握って  
冷く横わっているのが見附かった。)

古いキャビネットの中から宝石類を取り出してその持ち主たちの悲劇を  
想像する想像力溢れる詩である。余りにも長いので一部しか引用出来な  
かたが実に劇的、暗示的な詩である。

シャーロットの詩には余りにも引用したいものが多過ぎるのだが、始め  
から順に挙げてしまった。切々とした愛を描いたものとして (妻の意志)  
をあたってみたい。

The Wife's will (妻の意志)  
Sit still—a word—a breath may break  
(As light airs stir a sleeping lake,)  
The glassy calm that soothes my woes  
The sweet, the deep, the full repose.  
O leave me not! for ever be  
Thus, more than life itself to me!<sup>(23)</sup>

---

(じっと座っていらして。一言でも仰っしゃると、  
微風が眠れる湖面を動かすように  
私の歎きを沈める鏡のような静けさが  
楽しい深い完全な休息がこわれます。  
ああ出てゆかないで下さい。いつも側にいらして。  
私には命以上の方なのですから。)

Yes, close beside thee, let me kneel—  
Give me thy hand that I may feel  
The friend so true—so tried—so dear  
My heart's own chosen—indeed is near  
And check me not—this hour divine  
Belongs to me—is fully mine.

そうあなたのすぐ側に跪かせて下さいな。  
あなたの手を触わらせて下さいな、  
真実の方、試練を受けたいとしの方  
私の撰んだ方がここに居るのですね。  
この私の今の神聖な時間は  
全部私のものなのですから、  
妨げないで下さいな。)

“Tis thy own hearth thou sit'st beside,  
After long absence—wandering wide;  
“Tis thy own wife reads in thine eyes,  
A promise clear of stormless skies,  
For faith and true love light the rays,  
Which shine responsive to her gaze.

さまよい歩いた揚句、長い不在の後で、  
今座っていらっしゃる所は、  
あなたの家のいろりよ。  
あなたの眼の中に澄んだ空のような、  
濁りのない約束を読みとっているのは、

あなたの妻よ！  
信頼と真実の愛が輝き  
私の凝視に応えています。）

.....

Well may'st thou speak of love to me  
For, oh! most truly—I love thee!

(私は心からあなたを、愛していますもの、  
私に対する愛を仰っしゃって下さってもよいでしょう。)  
切々とヘガー氏に愛を訴えたシャーロットの帰国後の手紙にそっくりで  
はないか。

Day and night I find neither rest nor peace... If my master withdraws  
his friendship from me entirely, I shall be altogether without hope.<sup>(24)</sup>

(私には昼も夜も休らぎも平和ありません。もし、先生が私からすっ  
かり友情を差し控えると仰っしゃったら、私にはもう希望はありません。)

To forbid me to write to you to refuse to answer me, would be to tear  
from me my only joy on earth.....<sup>(25)</sup>

(私が先生に手紙を書くことを禁止なさったり私に返事を書くのを拒否  
なさったりすることは、私のこの世の唯一の喜びを引き裂いておしまいに  
なる事でございます。)

*Jane Eyre* に於いて強い独自の意志をもつ人間であることを主張し、如  
何に貧乏でも愛する権利はあると言えたシャーロットなのである。

Charlotte's relationship with Heger was only too similar to her  
Angrian fantasies<sup>(26)</sup>

(シャーロットのヘガー氏との関係は彼女のアングリヤ物語の空想と余  
りにもよく似ている。) と Margaret Blom は述べる。



注

- (1) *Brontë Poems, The early work of Charlotte, Emily and Anne Brontë*  
Mark, R. D. Seaward, E. P. Publishing Limited Introduction (viii)
- (2) *The Brontës and their world: Phyllis Bentley*; Thames and Hudson p. 86.
- (3) " " " p. 88.
- (4) *Brontë Poems* (Stars) p. 21.
- (5) " " " (A Death Scene) p. 40.
- (6) *Emily Brontë and Freedom* C. D. Lewis p. 365.  
*Emily Brontë Wuthering Heights*, W. W. Norton and Company
- (7) " " " p. 366.
- (8) *Brontë Poems* (The Philosopher) p. 23.
- (9) *Emily Brontë and Freedom* p. 370.
- (10) " " " p. 373.
- (11) (No Coward Soul is Mine) *The Complete Poems of Emily Jane Brontë*  
Hatfield Columbia University Press p. 243.
- (12) *Brontë Poems* (The Arbour) p. 26.
- (13) *The Poems of Anne Brontë*, A New Text and Commentary; Edward  
Chitham Lowe and Brydone Printers Ltd. p. 19.
- (14) *The Brontë Poems* (The Penitent) p. 44.
- (15) " " " (Music on Christmas Morning) p. 45.
- (16) *The Poems of Anne Brontë* p. 12.
- (17) *Charlotte Brontë* Margaret Blom, Twayne Publishers p. 19.
- (18) *Brontë Poems* (Pilate's Wife's Dream) p. 1.
- (19) *Charlotte Brontë* p. 21.
- (20) " " " p. 25.
- (21) " " " p. 26.
- (22) *Brontë Poems* (Mementos) p. 11.
- (23) " " (The Wife's will) p. 28.
- (24) *The Brontës and their World* p. 79.
- (25) " " " p. 79.
- (26) *Charlotte Brontë* p. 26.